様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：５５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２２６

研究課題名（和文）「哲学の外部」をめぐる思想史―ハイデガー、ゲオルゲ・クライス、ベンヤミン―

研究課題名（英文）History of Thought concerning the " Exterior of Philosophy" - Heidegger, George Circle, and Benjamin

研究代表者
稲田　知己（Inada, Tomomi）

津山工業高等専門学校・総合理工学科・教授

研究者番号：７０２２１７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　20世紀前半のドイツ思想史を構想するとき、哲学の最深部を暗黙のうちに規定しながら、かえって哲学的言説の内部では明示しえない「哲学の外部」があることに気づく。それが、「詩」であり、当時はヘルダーリンがとりわけ重要だった。この点を、ユダヤ系のベンヤミンを参照軸としながら、ハイデガーにおいて検証したのが、本研究である。
　本研究は新歴史主義的な研究方法を採用した。すなわち本研究は、ゲオルゲ・クライスによる「ヘルダーリン復興」という思想史上の大事件に着目し、それが投げかけたハイデガーとベンヤミンへの波紋を通時的かつ学際的に追跡することによって、「哲学の外部＝詩」という秘められた思想史的連関を究明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、20世紀前半のドイツ思想史研究として、貴重な歴史的資料を海外現地調査によって収集してきた。すなわち、ゲオルゲ派の「精神運動年鑑」等の専門古雑誌、後期ヘルダーリンを発見した文献学者ヘリングラートの遺著等、およそ1世紀前の稀覯本を渉猟することができた。また、マールバッハの国立文学文書館でハイデガーの自筆手稿も確認することができた。こうして得られた豊富な文献を活用しながら、哲学から文学にわたる学際的な新歴史主義的研究を遂行した本研究は、学術的にも貴重であると言えるだろう。本研究の研究成果は、学会発表、紀要論文、学術機関の専門論文で、さらにはネット上で広く社会に向けて公開されている。

研究成果の概要（英文）：　In the early 20th century academic interest in the German poet Hoelderlin was revived through the philological efforts of Hellingrath, a member of George Circle. This event had a great influence on the young generation at that time. The purpose of this study is to pursue the movement of the "Hoelderlin-Shock" in relation to Benjamin and Heidegger in new historical perspectives. This is a research of history of thought, more specifically, an interdisciplinary study between philosophy and literature, which seems to be still lacking at present.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ドイツ思想史　ハイデガー　ベンヤミン　ゲオルゲ派　詩　秘められたドイツ　ヘルダーリン　新歴史主義

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

もともと本研究者は、20 世紀最大の思想家ともいわれるハイデガーを、彼の膨大な全集にもとづいて研究してきた。つまり多くの哲学研究者がそうするように、ハイデガー哲学の形成・展開を純粋に内在的に解明しようとしてきた。そして、その代表的な成果が、ハイデガーの前期から後期にわたる全思想行程を追跡した浩瀚な著書『存在の問いと有限性――ハイデッガー哲学のトポロギー的究明』（晃洋書房、2006 年）だった。

けれども、ハイデガーの哲学的テクストを読めば読むほど、ハイデガー哲学には彼がはっきりとは語らなかった「前提＝哲学の外部」があったのではないか、それが彼にとっての「歴史的宿命としてのヘルダーリン」だったのではないか、と考えるようになった。そしてそれが、いまもさかんに議論されている「ハイデガーと政治」という問題系に決定的に関係していたのではないだろうか。

ハイデガーのナチス加担問題が問われて久しいし、没後 40 年を経て出版された「黒ノート」によって、彼の反ユダヤ主義疑惑が浮上し、こんにち世界的に論議されている。このような議論をする場合、たいていの研究者は後期ハイデガーの存在歴史的思索の脈絡のうちで、あくまで内在的に問題を読み解こうとする。こうした解釈方針はハイデガー・プロパーには自明であるが、しかしこのような問題を解明しようとするときは、内在的な哲学研究だけにたよるのでは、間口が狭すぎるのではないだろうか。このような場合こそ、「哲学の外部」を主題化しうる思想史研究が有効ではないだろうか。本研究がドイツ思想史研究を標榜するのには、このような研究の背景、研究の動機があった。

２．研究の目的

20 世紀前半のドイツ思想史を構想するとき、哲学の最深部を暗黙のうちに規定しながら、それゆえかえって哲学的言説の内部では明示しえない「哲学の外部」があることに気づく。神なき時代にあっては、それは「詩」であり、とりわけ、ゲオルゲ・クライスの一員だった文献学者ヘリングラートによって発見された後期ヘルダーリンが重要だった。あらたに見いだされたヘルダーリンは、ハイデガーやベンヤミンなどの当時の若い世代に深甚な影響を与えた。研究者のあいだで「ヘルダーリン・ショック」と呼ばれるドイツ思想史上の一大事件である。クライスの領袖だったゲオルゲにとって、ヘルダーリンは「つぎのドイツの未来の方向を示す標石」、「新たな神を呼ぶ人」だったが、このような思想史的連関がハイデガーを理解するうえでの歴史的制約として注目されねばならない。

上述のような歴史的布置を、ユダヤ系のベンヤミンを参照軸としながら、ハイデガーにおいて検証しようとするのが、本研究である。つまり本研究の目的は、ゲオルゲ・クライスやヘルダーリンに関するハイデガーとベンヤミンの哲学的言説を具体的に追跡することによって、「哲学の外部＝詩」という秘められた思想史的連関を明るみに出すことである。このような「哲学の外部」を主題化する思想史研究によるなら、こんにち世界的に論議されているハイデガーの政治問題に対して、広い歴史的視野からの解明をもたらすことができるだろう。

３．研究の方法

本研究は、思想史研究として、新歴史主義的な研究方法を採用する。「新歴史主義」という術語は、本来は、文学理論の分野で使われる用語である。新歴史主義的な研究手法によれば、作品の内在的研究の特権性は否定されるのであって、どんな偉大な哲学書であれ、時代という巨大な物語テクストから、同時代の文学作品等の周縁的テクスト群をも学際的に配慮しつつ、通時的に読解されるのでなければならない。本研究は「哲学の外部＝詩」をめぐる思想史研究なのであるから、この研究方法の有効性が期待できるだろう。

これまで本研究者は、「技術哲学の新歴史主義的研究――カッシーラー・三木・ハイデガーの 1930 年代」、「住むことを学ぶ――ハイデガー居住論とモダニズム建築」というテーマで科研費の助成を受け、新歴史主義的な研究手法に習熟してきた。本研究では、ゲオルゲ・クライスやベンヤミンを新たに取り上げ、哲学史と文学史との学際的研究を推し進めた。つまり本研究は、20 世紀初頭にゲオルゲ・クライスのうちで生起した「ヘルダーリン復興」というドイツ思想史において看過しえない出来事に着目し、その出来事が投げかけたハイデガーやベンヤミンへの波紋を徹底的に追跡することによって、「哲学の外部=詩」という秘められた思想史的連関を究明していった。

４．研究成果

以上の研究目的と研究方法によりながら、本研究者は、ミュンヘン州立図書館、ベルリン州立図書館、ライプツィッヒ国立図書館などで現地調査を実施することによって、貴重な歴史的資料を収集してきた。たとえば、ゲオルゲ派の「精神運動年鑑」等の専門古雑誌、文献学者ヘリングラートの遺著等、およそ１世紀も前の稀覯本を渉猟することができた。さらにはマールバッハの国立文学文書館でハイデガーの自筆原稿を確認するとともに、ハイデガーの遺品のなかからゲオルゲ派のグンドルフやヘリングラートの書簡や手稿を発見し、思想史研究を力強く

前進させた。
　このような豊富な研究文献を発掘しつつ、「ヘルダーリン・ショック」という 20 世紀ドイツ思想史上の一大事件を追跡した本研究は、次のような結論を得た。すなわち、ヘリングラートによる後期ヘルダーリンの発見という出来事から、ベンヤミンもハイデガーもともに大きな衝撃を受け、ヘリングラートから触発されてそれぞれ独自にヘルダーリン解釈の仕事にたずさわり、最終的には「秘められたドイツ」をめぐって両雄の対決する歴史的構図が明らかになった。とりわけハイデガーにおいては、その衝撃の影響は永続したのであり、この点ではハイデガーはどこまでも忠実だった。前期ハイデガーの『存在と時間』、1933 年の政治加担、後期ハイデガーの『哲学への寄与論稿』、こうしたハイデガーの哲学的思索の変貌の根底にあって、それを支えていた本来実存的―共同存在的な根本経験こそ、ヘリングラートによるヘルダーリン、つまり「秘められたドイツ＝ヘルダーリン」だった。この根本経験は、前期から後期まで一貫しているハイデガー哲学の核心であり、政治参加の原動力ともなったものである。本研究のこのような成果は、従来のハイデガー解釈の定説をくつがえすものである。
　最後に、本研究は研究成果を、学会発表や学術論文のかたちで公表するとともに、ネット上でも広く社会に向けて公開している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①　稲田知己、ヘルダーリンは蘇るか―ヘリングラート、ベンヤミン、そしてハハイデッガー、日独文化研究所年報『文明と哲学』、第 10 号、2018 年、pp.172-194、査読有

②　稲田知己、蘇るヘルダーリン―ヘリングラート、ベンヤミン、そしてハイデガー、津山工業高等専門学校紀要、第 58 号、2016 年、pp.23-34、査読有、オープンアクセスとしている

〔学会発表〕（計１件）

③　稲田知己、ヘルダーリンは蘇るか―ヘリングラート、ベンヤミン、そしてハイデガー、関西ハイデガー研究会、2018 年

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。